被災地派遣レポート＜第５８回＞

建設局総務部技術管理課　島村　豪さん

東日本大震災が発災してから１年が経とうとしていた３月上旬に課長から派遣の話を頂いた。聞いた瞬間は、私の経験で戦力になれるのか不安が頭の中をよぎった。だが、次の瞬間、これだけ日本中が東北のために力を集結しているときに少しでも何でもいいから力を貸せるチャンスがきたと思った。時間を置かずに行きますと回答した記憶がある。行くと決まってからは、初めての災害派遣だったので何の準備をすればいいのかも分からず先ずは災害手帳を読んだ。しかし、内容を理解するのに手間取っているうちにあっという間に３月が過ぎた。

４月１日の日曜日に岩手県沿岸広域振興局土木部へ赴任した。土木部が管轄する釜石市・大槌町は、岩手県の沿岸南部に位置しており、釜石へは新花巻駅からＪＲ釜石線の快速で１時間 30 分かかった。電車に揺られながら、不安を抱きつつ向かった。内陸から釜石へ向かう途中は、下車した小佐野駅周辺は被災しているようには見えなかったが、釜石市内にある仮設住宅へ向けて車に乗り、走り始めると直ぐに被災している状況を目の当たりにした。また、仮設住宅に到着してから隣町の大槌町にあるスーパーへ買い出しに行ったが、そこも被災しており、報道で見て知っているつもりであったが、それ以上であり言葉を失った。道路上の瓦礫は撤去されており、道路は問題なく走行することが出来たが、自然の力はとても強く人間の小さを感じた一日となった。

踏切盤のみ残った鉄道

翌日、仮設住宅から釜石市街地にある沿岸広域振興局へ初出勤した。出勤後直ぐに岩手県庁がある盛岡に行き、県庁にて達増知事から激励の言葉を頂いた。県が一体となり復旧・復興していくという姿勢を感じ、微力ながら頑張らなければと改めて思った。達増知事の言葉を頂いてから釜石へ戻り、沿岸広域振興局長から辞令交付を受けて岩手県庁の職員として復旧・復興の為に全力をかけると心に誓った。

私の職場には、東京都から４名、他に静岡県から５名、福岡県から２名の職員が派遣されていた。派遣職員は、河川・港湾と道路に分かれて仕事をしていた。道路班は、東京都３名、福岡県１名で職務に当たっていた。道路班は、発注された工事の工事監督が主であり、工事件数は合計１４件、また、昨年度、用地等の関係で実施設計が行えなかった案件が３件あった。私は道路班の一員として、６件の工事監督と１件の実施設計書作成を行うことになった。工事監督は、道路照明工事、路面打替工事、安全施設工事、石積・法面工事、実施設計の内容は、法面工事であった。

本格的に工事が進んでいくと設計書と現場での差異が生じ、毎日のように現場に行き現場を止めないように、すぐ確認・回答することが必要である。しかし、釜石市は面積がとても広く、１日に約 120ｋｍ移動したこともあるなど一人で行ける現場は限られるため、岩手県庁の職員や他県の派遣職員等多くの人に力を貸していただきながら仕事をした。私が席を置いていた部屋には、巡回車で定期的に道路等の危険個所を点検している方がおられた。その方とも情報交換しながら担当工事の進捗状況を確認した。組織で仕事をしていると当たり前と思えるようなことも、被災地ではこの団結力がいかに重要であるか、身をもって感じた。

県には県としての仕事の進め方があるため「郷に入っては郷に従え」で、工事監督では土木部の方々には色々教えていただきながら業務を進めた。通常業務等で忙しい中でも細かい事を嫌な顔をせずに相談にのってくれた。また、現場では、現場代理人と多くのコミュニケーションを図りながら工事を進めた。業者の中にも多くの被災者がおられる。工期を守るために工程管理はしなければならないが、被災されて色々な気持ちを持たれていることを配慮し、話し方には気をつけた。

６月には、職場で派遣職員を囲む会を開催していただき、他の部署の方々とも多くの話をすることができ、とても有意義な時間を過ごすことが出来た。沿岸広域振興局長はじめ岩手県職員、他県の派遣職員の皆さんに仲間として受け入れられたことは、とても嬉しかった。

派遣職員を囲む会にて

本当にあっという間の３ヶ月であった。日々、無我夢中で多忙な時間を過ごしてきたが、多くの人の力を集結して工事が進んでいる中でも、仮置きしている瓦礫の山は増える一方で減ることは無かった。瓦礫が無くならない光景を目の当たりにすると、悲しくなった事を覚えている。私は悲しさを抱えていたが、被災した現地の方々は不自由な生活をしているにもかかわらず、とても気持ちが強く前を向いてしっかりと生活しており頭が下がる思いだった。今年度は、復興元年であり、元年に仕事ができたことはとても貴重な経験であった。また、道路や河川・港湾等のインフラを担っている技術系職員の重要性を改めて感じた。

我々派遣職員に対して親切にしていただき、岩手県の方々には感謝の気持ちでいっぱいである。一日も早い復旧・復興を祈願している。